

発達障害の子どもが園で生き生きと過ごせるために

竹田 契一 大阪医科大学LDセンター顧問

発達障害は全て中枢神経系の障害が背景にあり、広い意味で脳の障害です。親の「育て方」「躰」「その子の生まれ育った環境」が原因にはならないことが分かっています。けれども、子育てはうまくいって当たり前、何かあると全て母親に責任があるような風潮がまだまだ日本には残っています。うまく相談する人や場所が見つけれず孤立してしまう母親もいます。子どもが様々に発達の課題を抱えているときには、子どもだけではなく、その背景にいる母親が非常に辛い思いをし、不安な気持ちでいることにも思いを巡らせてください。

発達障害の子どもの特性に合わせた関りや環境が整っていないことから、子どもがふさわしくない行動をとってしまったり、トラブルになったりすることがあります。困った子どもだと思われがちですが、困っているのは子どもの方です。どうして自分が叱られるのかが理解できない、あるいはその場では理解できてもすぐに忘れてしまうなどの特性から同じことを繰り返してしまい、「何度言ったら分かるの」とまた叱られる。「自分はダメな子だ」とどんどん自信が無くなってしまいます。できていないことを叱るのではなく、できたとき、我慢できたときなど頑張ったプロセスを褒めましょう。伝えるときには、ゆっくりと丁寧にはっきりと優しく言いましょう。そして子どもが発している言葉の裏にある伝えたい気持ちを理解しようとする寄り添う気持ちが大切です。2つ以上のことを同時にするのも苦手です。見通しを持って段取りを追って取り組めるように、指示の仕方を工夫しましょう。

発達障害にはADHDや自閉スペクトラム症などがあり、それぞれに特性があります（詳しい内容については、講義録をご覧ください）。そして同じ障害であっても子ども一人ひとりがもつ特性は違います。子どもが生き生きとしっかりとその場を過ごすためには、子どもに合わせる必要があります。発達障害の特性の理解はもちろんのこと、一人ひとりの子どもをしっかりと理解し関わって欲しいと思います。